



ἀγγελία 教養教育ニュースレター

ア

ン

ゲ

リ

ア

「アンゲリア」はギリシャ語で「ニュース・伝言・メッセージ」という意味です。

第4号

春

国立大学法人岐阜大学
教養教育推進センター

No.4 March 2007

応用生物科学部が担当する授業の紹介

教養教育推進センター員（応用生物科学部） 葭谷 耕三



応用生物科学部は平成19年度の全学共通教育で、1単位の総合科目を0.5科目として数えると、37.5の授業を担当します。ここでは主に応用生物科学部の教員が開講している授業を紹介したいと思います。紙面の都合上詳しくは書きませんが、生物や農業に関連する授業を受講してみたい方は、参考にしてください。

最初に、学生がシラバスを読んで受講してみたいと思う授業を、受講人数をバロメーターとして、いくつかの授業科目名を紹介します。平成18年度を受講人数が多かった順に、総合Ⅰの「生き物よもやま話」、個別・自然（概論）の「生命の仕組み」、総合Ⅰの「世界の農業事情」、総合Ⅰの「化学と生物のインターフェイス」などです。いずれの授業も受講者数が100名を超える規模で、複数の教員が担当し、全学部の学生を対象に開講されている科目です。「生き物よもやま話」は平成18年度を受講者数が200名を超えた授業で、教育学部や地域科学部の学生が多く受講していました。「生命の仕組み」は授業時間帯の都合で、教育学部と応用生物科学部、「化学と生物のインターフェイス」も教育学部と工学部で大多数を占めていて、「世界の農業事情」は工学部、次いで教育学部の学生が多く受講していた科目です。これらの授業は教育学部や地域科学部の学生に人気があるようですが、受講者数が100名を超える規模の授業は決してよい環境にあるとは言えません。しかし、何か学生を惹きつける魅力があるようです。

次に、受講人数ではなく、平成16年後学期と平成17年前学期に行われた学生による授業評価で、実際に受講してみて、満足度の高い評価を得た授業（当センター発行の「教養教育こんな授業を受けたいベスト10集」参照）で、今年度も引き続き開講される授業の科目名を紹介します。総合Ⅰの「環境、エネルギー、生活の化学」、「フィールド科学概論Ⅰ—ご飯ができるまで—」（本冊子創刊号も参照）、「生物共生論」、総合Ⅱの「生物の多様性と人間社会」などです。これらの授業は平成18年度を受講人数が50人を超えない授業であり、良好な環境のなかで学習できると思います。

上記の「教養教育こんな授業を受けたいベスト10集」には教養教育推進センター開講の授業の中で学生から満足度の高い評価を得た授業が網羅されていますので、全学共通教育の授業の履修にシラバスとともに参考にしてください。教養教育推進センターのホームページから広報誌・刊行物のところをクリックすると一番下にあります。



教養教育推進センター員（工学部） 若井 和憲

授業編成部門会の委員として

授業編成部会の委員として私が気にしている話題はやはりリメディアル教育になる。そもそも、この問題は十年以上前にさかのぼる。それは教養教育から外れ、工学部でのことだった。入試とは何かから問題に当たらねばならないが、本来、「試験に合格したということは、その学力があれば授業について行ける」ということであるべきであろう。入試が多様化されたあと、私の所属する工学部を例に取れば、後期日程試験合格者は数学Ⅲの洗礼を受けずに来る。それは、入学時の数学の実力差を認めていることになる。ならば、後期日程入学者用の授業科目編成が特別に有っても良いはずである。ところが、実際は学生の選択ということに任せている。入学してきた学生を差別できないという配慮があるのかもしれない。一方でその平等論は、一層学力の差が付く可能性を放置することにほかならない。さらに工学部では二教科型という試験制度があった（今は廃止されている）。たとえばセンター試験でも個別試験でも、英語が課されない。必然的に、英語嫌いの学生はこの受験を選びやすい。「一芸に秀でるものは二芸に秀でる」という当初の楽観的期待は裏切られることになった。それどころか、4年生になって卒研の論文読みで「英語は要らないという試験をしておいて、

今更特別授業をしてくれたわけでもないのに、英語の論文を読めとはいかがなものか」という学生が現れるようになったと聞く。

教養教育に話を戻そう。入り口の多様化で、さらに専門高校卒業者への窓口も広くすることになった。それ自体は良いことだ。問題は、岐阜大学ではそうした学生への特別な手当はしてこなかったことにある。そういう学生は専門科目はある程度受けているものの、教養科目がいわば苦手である。それは高校で受講した科目内容からして当然のことであろう。そういう学生を受け入れながら、普通高校からの入学生と比較して不足する学問分野の補強をしなければ、その学生は不幸である。事実、推薦Ⅰという入試はセンター試験を課さなかったが、教養教育についてこられず、止めるひとが出た。いわば、制度の犠牲者だ。今は、その不足を補ってもらうために、リメディアル教育科目が取り入れられている。これは全国的に見て、遅れている方だろう。進んでいるところは実に進んでいる。先生方には、そのような教育をすることは不要という考えを持つ人もあろう。だが、入試自体には欠陥が無いのに、その後のフォローアップで欠陥を作っていたことになる。

それならば、リメディアル教育科目を充実すれば欠陥は消えただろうか？そうではない。これから先は教養教育から逸脱する発言であるが、敢えて言う。先日の教養教育推進センターのFD研究会で発言したが、専門高校出身者はいわゆる教養教育的科目は入学した段階で普通高校出身者に、劣ることになっている一方で、専門教育科目は進んでいる。そこを認めてあげなければ、片手落ちである。それを考慮しなければ、罰則を与えているようなものになる。リメディアル教育には、良いものをさらに伸ばす教育も含まれるという。ならば、その科目は専門課程での授業編成で対応していただきたい。でなければ、教養教育でリメディアル教育科目を作る意味が、問われることになる。

教養教育 授業訪問シリーズ No.4

空間認識力訓練技術

吉田 敏 教授 高橋義人 講師（非常勤）

この授業では、岐阜大学で開発した訓練用内視鏡を用い、人工的でリアルな大腸モデルに挿入し、大腸内視鏡の操作方法の体験及び訓練実習を行い、訓練度を数値化します。

内容からすると医学部の専門科目のようですが、教養科目に導入した動機を吉田 敏教授にインタビューしました。（吉田教授）

現在、内視鏡は、医療分野に限らず、遺跡調査や機械工学の分野など産業界でも幅広く使われております。例えば地震でガレキの下敷きになった人を探したり、テレビの生物番組で巣穴の様子を映したりするのを見た人は多いと思います。

教養の授業としては、脳と視覚に関する基礎的学習と実際の体験を通して、視覚認識への理解を深めてもらうのが動機です。また、医師や獣医師を目指す学生さんにとっても、実際の高度な医療器具操作を1年生で体験することで、将来進路の選択においてきっと役に立つことがあると思います。



教養教育について思う

医学部看護学科2年生

加藤早苗

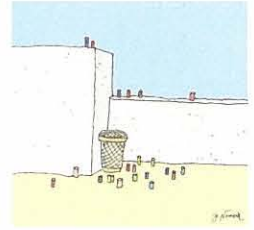


教養教育というのは、勉強の場であると共に出会いの場であると思う。講師の方との出会い、他学部の学友との出会い、知識と出会いなど、様々な出会いがあるが、中でも一番の出会い自分との出会いではないだろうか。

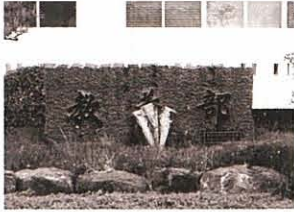
私が受けた中で最も印象的で、最も多く自分との出会いを与えてくれたのは教養教育の「自分らしいキャリア設計」という講義だ。そこでは、講師の方々の話を聞くだけでなく、自分で自分について考え、自分の強みや弱みを見つけたり、今後の人生について計画を立てたりするということをさせてもらった。全ての講義がおわると、自分というものについて意外と分かっていなかったのだということに気づいた。大学生活ではその分かっていない自分について少しでも分かっていければいいと思う。そして、教養教育がそれにおいて一役買っていると私は思う。もちろん、学部・学科ごとにある専門科目によって得られることは決して少なくないし、将来的に直接役に立つのは専門教育が多くを占めるだろう。しかし、それと同じくらいのことを、私は教養教育によって得ることができたのだ。

学ぶことで自分を知り、知ることで私は私を磨いていくことができる。そのことに気づかせてくれたのは他でもない、教養教育なのである。

むかし教養部というところが大学にはあった。



教養教育推進センター員（教育学部） 野村 幸弘



むかし教養部というところが大学にはあった。ちょうど10年前のことだ。10年ひと昔。今ではそんなことを気にかける人はほとんどいない。今の学生はまったく知らないだろう。全学共通教育棟の前にかつての「教養部」の碑(?)がひっそりと墓石のようにおかれていることに気づく人もいない。

僕は今から5年前、まるでお墓参りのようにその碑に献花したことがある。信心深いのだ。教養教育に深い信頼を寄せている、という意味である。

去年、教養教育推進センター員になって、センターの看板をつけることを提案した。そして広報誌をどんどん出すことになった。いろんな広告物や発行物が毎日届き、それらがゴミになって行く中で、なんとかゴミ箱に捨てられないような広報誌。捨てずに手元に残しておきたい。ゆっくり中味を読みたい。そんな美術品のような印刷物を作りたい。それがこのニュースレター「アンゲリア」であり、広報誌「ディアロゴス」である。

4月11日から『学習支援室』を開設します！

教養教育推進センターでは、4月から「学習支援室」を開設します。

◆何でも相談室

学習面、履修関係などについて、教員及び各学部の学生相談員が対応します。何でも相談ください。

【開設曜日・時間】

月・火曜日：16時から18時
水曜日：13時から17時

◆英語学習相談室

英語の基礎学力の修得、英検・TOEFL・TOEIC受験など英語学習全般及び留学などについて、英語担当教員が対応します。

【開設曜日・時間】

(前学期) 火曜日：12時半から14時
(後学期) 月曜日：12時半から14時
*いずれも授業開講期間（休業・休講期間を除く）



編集後記

平成18年度から教養教育推進センターからのニュースを手短かに早く皆様にお届けしようということで、ニュースレター「アンゲリア」を企画いたしました。その4号を配布させていただきます。今年初めての企画であったため至らぬ点が多々あったと思います。来年度はその反省を踏まえ、多くの教員・学生の声も取り込んでいきたいと考えております。皆様のご協力が何よりも欠かせません。いろいろとアイデアやご意見をいただけたらと思います。そうした環境を早急に作ろうと思索している最中です。来年度も宜しく願いたします。

編集責任者 教養教育推進 副センター長 小澤克彦